

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

凶 悪

2013年・日本映画
配給/日活・128分

2013(平成25)年10月6日鑑賞

梅田ブルク7

Data

監督・脚本：白石和彌
原作：宮本太一・新潮45編集部編
『凶悪—ある死刑囚の告発』
(新潮文庫刊)
出演：山田孝之/ピエール瀧/リリー
・フランキー/池脇千鶴/
白川和子/吉村実子/小林
且弥/斉藤悠/米村亮太郎
/松岡依都美/ジジ・ぶう/
/村岡希美

👁️👁️ みどころ

多くの凶悪殺人の死刑囚が、スクープ雑誌の記者に余罪の3件の殺人罪を告白！その目的は、娑婆でのさばっている首謀者の「先生」を追い詰めること。しかし、そんな話は信用できるの？

綿密な取材から発掘された、身の毛もよだつような実話に、あなたはどう立ち向かう？園子温監督の『冷たい熱帯魚』（10年）も人間の凶悪さに迫ったが、本作は実話にもとづくだけに、そのリアルさはすごい。さすが、若松孝二監督の薫陶を受けた白石和彌監督の手腕に拍手！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■この「悪人ぶり」は、あの「悪人ぶり」と双肩！■

李相日監督の『悪人』（10年）は、イケメン俳優・妻夫木聡が主演していただけない、どうしても「悪人ぶり」のインパクトが弱かった（『シネマルーム25』210頁参照）。それに比べると、園子温監督の『冷たい熱帯魚』（10年）で個性派俳優・でんでんがあつと驚く快演をみせた、主人公・村田の「悪人ぶり」はすごかった。また、村田の妻役を演じた美人女優・黒沢あすかが村田とともに殺した人間の肉体を切り刻み、「透明」にしていくシーンでの彼女の「悪女ぶり」もすごかった（『シネマルーム26』172頁参照）。しかし、『凶悪』と題された本作に見る、ピエール瀧演じる主人公・須藤純次と、リリー・フランキー演じる「先生」こと木村孝雄の凶悪ぶり、悪人ぶりは・・・？

本作の冒頭、いかにも凶悪な顔をした須藤純次が舎弟No. 1の五十嵐邦之（小林且弥）、舎弟No. 2の日野佳政（斉藤悠）と共に行う、残忍な殺人風景が提示される。須藤のムシヨ仲間だった新島組の組員・佐々木賢一（米村亮太郎）をいたぶるシーンも残忍だが、若

いアバックを縛り上げて殺すシーンの残忍さは、それ以上。女を徹底的に強姦したうえ、2人の身体にガソリンをまき、そこに火の付いたたばこを落とすのを楽しむかのような須藤たちの行動を見ていると、思わずゾー。さらに車の中で「お前だけは信頼していたのに！」と言いながら五十嵐の股間にピストルを向け、何の弁解も聞かないまま、ピストルをぶっ放す須藤のやり方を見ていると、こりゃ「凶悪」以外の何物でもないことがわかる。したがって、そんな須藤が意外に早く警察官によって逮捕されるシーンが登場すると、思わずホッとひと安心。しかし、実は本作の本格的展開はここからだ。

■□■なぜ上告中の死刑囚が余罪を告白？■□■

本作のカゲの主人公(?)は、スクープ雑誌『明潮24』の記者・藤井修一(山田孝之)。編集長の芝川理恵(村岡希美)から、小菅の東京拘置所に収監中の死刑囚・須藤純次から届いた手紙を渡され、会いに行くよう命じられた藤井が面会室で会ってみると、いかつい身体をした須藤から「私には、まだ誰にも話していない余罪が3件あります」と告白されたからビックリ。なぜ、すでに死刑を宣告され、現在上告中の須藤が殺人の余罪を告白するのか?それって、自分で自分を不利にしてしまうのでは・・・?それに対する須藤の答えは、殺人事件の首謀者で、通称「先生」と呼ばれていた木村孝雄が「娑婆で、のさばっていることが許せねえ!」ためらしい。しかし、須藤があいまいな記憶の中だけで喋る「そんな殺人の告白」に信憑性はあるの?

須藤が語る余罪は、①殺した遺体を焼却炉で燃やしたこと、②名前に“島”がつく、身寄りのない老人の土地を転売した挙げ句、生き埋めにして殺したこと、③借金苦の電気屋に保険金をかけて、酒を飲ませて殺したこと、の3つだ。しかし、芸能ネタを追っかけて売り上げ部数を増やそうとしている『明潮24』のようなスクープ雑誌が、そんなネタを真面目に追いかけて意味があるの?「先生」なる人物の職業が不動産ブローカーだと聞かされた芝川は、「不動産ブローカーがヤクザと組んで人を殺しても、当たり前すぎて記事にならない」とパッサリ!そして、藤井をある芸能人のお泊りの取材に向かわせようとしたが、さて藤井は・・・。

■□■藤井はなぜ、ここまで?■□■

本作は89年に新潮社に入社し、05年に『新潮45』に配属された宮本太一氏が、07年に執筆した『凶悪—ある死刑囚の告発』を原作としているらしい。そんな「ネタ」を、若松孝二監督の薫陶を受けた白石和彌監督が共同脚本を書いて監督したのが本作だから、かなりの部分が事実在即したものらしい。私の目には、なぜ一介のスクープ雑誌の記者にすぎない藤井がここまで「現場主義」にこだわり、あいまいな記憶にもとづく須藤の話の「うら」を取っていくのかが不思議に思えたが、藤井の「語り部」としての一徹さが本作を骨太作品として成立させる根幹となっている。

もともと、認知症の母親・藤井和子（吉村実子）の世話を妻の藤井洋子（池脇千鶴）に任せ、家庭内の問題を先送りしたまま、自分の仕事だけに専念する藤井の生き方が、今ドキ誉められたものではないことは、誰の目にも明らかだ。会社の他の仕事を放り出し、また妻からの話し合いの要請も無視して、とりつかれたように現場を訪れている藤井の目にある目見えてきたのは、先生が菅原（伊藤紘）を絞め殺しているシーンだが、これは現実？それとも幻？

■□「先生」の登場の仕方に注目！その凶悪ぶりに注目！■□

もちろん、これは映画特有のテクニックでインチキそのものだが、こんな、演出方法によって、ここにはじめて登場する「先生」こと木村孝雄の持つ、強烈な個性がより強調されることになる。必死になってひもで首を絞め続けたことによって、やっと静かになった菅原の姿を見て、木村はひと安心。携帯電話で須藤に連絡をとり、その死体の始末を依頼すると、須藤は直ちに森田土建の社長・森田幸司（外波山文明）に電話して、死体を焼くために焼却炉を使わせてくれと申し出たからさらにひと安心。ところが菅原の死体を運んだものの、意外と焼却炉が小さいため死体が入りきらないことがわかると、さあ、困ったものだ。そこで、須藤は「ナタはないか？」と質問したが、さて須藤はナタを何に使うの・・・？それは、『冷たい熱帯魚』で見たのと同じように、死体を切り刻むためだったから、森田社長がそんな風景を見て嘔吐したのは当然。ところが逆に先生は、切り刻んだ人間の肉が焼却炉の中で燃え上がるのを楽しむかのように・・・。

世の中には不動産ブローカーという名の職業の人がたくさんいるが、一戸建ての家に住んでいる木村は、かなりあくどい不動産ブローカーの仕事をしているためか、相当の現金収入があるらしい。したがって、木村に協力して殺人行為を重ねるごとに相当の謝礼をもらい、パートナー＝盟友＝同志のような位置づけにしてもらっている須藤も、その内縁の妻である遠野静江（松岡依都美）も今や木村にぞっこんだ。切り刻まれた菅原の死体が焼却炉の中で焼かれるのを楽しむかのようなシーンの直後には、木村宅でのホームパーティーで、木村の家族や須藤たちがフライドチキンを頬張るシーンが登場するから、それには思わずニヤリ。なるほど、なるほど、白石監督の演出は、あれこれと面白い・・・。

■□酒好きも、ほどほどにしなければ・・・■□

須藤が告白する3つの余罪のうち最も陰湿で手の込んでいるのが、牛場悟（ジジ・ぶう）を酒びたりにさせて殺してしまう第3の余罪。現在、牛場電機設備を仕切っているのは息子夫婦だ。金に困った彼らは、年老いた父親の悟にかけていた生命保険金に目をつけたが、入院した悟がまた戻ってきたため、当惑気味・・・。

それを聞いた「先生」は、自分の会社の雑用などして雇ってあげようということにし、実は悟に大好きな酒をたらふく飲ませて早く殺してしまうことを計画。もちろん、これには悟の妻も息子夫婦も暗黙の了解をしていたから、人間って恐ろしい。それを聞かされた

悟は自分の置かれた立場にびっくりだが、「家族のために早く死ねよ」と言われても、「ハイ、わかりました」と言えるはずがない。苦しむ悟を楽しむかのような姿や、90度以上のアルコールを無理矢理に口の中に流し込む姿を見ていると、こりゃ言葉遣いは丁寧だが、この先生は生まれながらの「凶悪犯」と思わざるをえない。

悟がこんな立場に置かれ、結果的に酒で殺されることになったのは、もともと酒好きで、酒ならいくらでも飲めるのが自慢だったためだから、酒好きもほどほどにしなければ・・・。

■法廷シーンに注目 その1■

刑事訴訟法上の「告訴」は被害者がするものだが、「告発」は誰でもできるから、藤井が執念を持って取材した事実を指摘さえすれば、いくら「コトなかれ主義」の警察でも、重い腰を上げざるをえない。その結果、登場するのが後半のハイライトシーンとなる、先生こと木村を裁く法廷シーンだ。焼却炉で焼かれた第1の余罪の被害者・菅原や、土の中に埋められてしまった第2の余罪の被害者・島神剛志（五頭岳夫）の死体や、その残骸が発見されたのかどうか、その他の物的証拠がどこまで出そろったのか、その結果、木村はどれだけの罪で裁かれているのか等々が明確にされないのがイマイチ不満だが、一つの殺人罪だけでは容易に死刑にならないのが、現在の日本の実状だ。

情状証人として、「検察側の証人」となった須藤は、法廷で木村の凶悪ぶりを強く訴えたが、さて、木村に対して下された判決は・・・？

■法廷シーンに注目 その2■

木村が逮捕されたことを小菅拘置所の中で藤井から聞かされた須藤は、当初は大喜び。しかし、この頃から、須藤はキリスト教に入信したことや、毎日習字の練習をする日課をこなすうちに充足感を覚え始め、今や生きる意欲が湧いてきたこと、等を藤井に話し始めたから、藤井がそれに違和感を覚えたのは当然。

一体、この男は何のために藤井に対してあんな告白をしたの？そして、藤井は一体何のためにその取材をし、発表したの？それによって木村は逮捕され、裁判にかけられたが、それって一体何の意味があるの？しかも、それは藤井が自分の家庭を放置し、ボロボロにしたことの代償としてだから、藤井があれこれと思い悩んだのは当然だ。

木村の裁判で情状証人として出廷し、それなりの役割を果たし終えた須藤を待っていたのは、今度は3件の余罪についての須藤自身の裁判。もちろんこれは、自分が殺人行為をしたことを自白したうでの裁判だから、その進行は早い。そして藤井が後に聞かされたところでは、須藤は懲役20年という刑罰を受けたそうだが、それって一体何の意味があるの？巧みに、須藤を裁く法廷に証人として出廷した藤井は、須藤に対して「お前は生きる意欲など持ってはいけない人間なんだ」と食って掛かったが、それは、一体なぜ？

■□■藤井の狂気を、あなたは どう受け止める？■□■

本作は、2人の絶妙なペア（チームプレー）で次々と殺人行為をくり返す凶悪犯・須藤と木村の2人がストーリー構成の主人公だが、このような人間の内面を追い、それを考えるための「語り部」となるのが藤井だ。死刑判決に対して上告している須藤の上告審は、上告審の最中に3件の余罪が発覚したことによってさらに懲役20年の判決を受けたのだから、ひっくり返るはずはなく、死刑判決の確定はまちがいない。他方、無期懲役の判決を受けた木村は、年齢との兼ね合いもあるが、仮釈放の制度があるうえ、恩赦や特赦によって釈放される可能性も十分にあるから、木村への無期懲役の判決がどこまで妥当なのかは誰もわからない。裁判での決着というのは所詮、その程度の意味合いしかないわけだ。

他方、妻の洋子から離婚届への署名を要求されていた藤井は、今やっと母親を老人ホームに入れる決心をしたが、こんな体験をした藤井の家庭は一体どうなるの？本作ラストには、夫婦そろって母親を老人ホームに連れて行くシーンが登場する。これを見ると、藤井がやっと母親を入所させる決心をしたことによって、洋子は離婚の決心を撤回し再び平穏な夫婦生活に戻ったのかなと一瞬思ったが、さて現実は・・・？小菅拘置所で須藤の話を聞いた藤井は、なぜここまで須藤の告白に固執したの？また、一介のサラリーマンとしては異常ともいえる執着心を見せて木村を追ったのは一体なぜ？本作を鑑賞するについては、そんな藤井の狂気をどう受け止めるかが大きなポイントだ。

2013（平成25）年10月10日記